パチュリー最強伝説

澄田　康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パチュリー最強伝説

【Ｎコード】
Ｎ９７７３Ｎ

【作者名】
澄田　康美

【あらすじ】
この話は「パチュリーがもし健康になって、身体能力もそれなりだったら？」なんて発想から生まれました。こっちがわしのアカウントを取って投稿しましたので、バクテリアの方とごっちゃにしないでくださいね。短編読み切りですけど、まあどうぞ。

（前書き）

前書き
この話は「パチュリーがもし健康になって、身体能力もそれなりだったら？」なんて発想から生まれました。こっちがわしのアカウントを取って投稿しましたので、バクテリアの方とごっちゃにしないでくださいね。短編読み切りですけど、まあどうぞ。

シチュエーション設定
パチュリーが図書館でいつものように読書をしていた時。時間は昼ごろで天気は晴れ。

ここは紅魔館の図書館。
見張りと言うべきか趣味と言うべきか、いつものように本を山積みして、今日も黙々と読書をするパチュリー。
そんな時に、これまたいつものように魔理沙が箒に跨ってやってきた。用は言うまでもない。

魔「おーっすパチュリー！！また本借りてくぜ。」

そう言って、パチュリーが返事もしていないにも関わらず、本棚にある本を次々と取り出した。

パ「ちょっと、まだ私は許可してないでしょう？」

自分の呼んでいた本を読むのをやめて、魔理沙を睨んだ。

魔「いいじゃねぇか。あくまで借りるだけなんだから。」

と言っている魔理沙の手元には、既に取り出した本が数冊あった。

パ「貴方の場合、返さないのが問題なのよ・・・」

ぶつぶつと魔理沙に言ったが、聞く耳を持たないとはまさにこの事

である。

魔「大丈夫だって、死んだら返すよ。」

パチュリーの心情など察する訳もなく、魔理沙は颯爽と飛び去っていった。

パ「待ちなさい・・・」

立ち上がり追いかけようとしたが、もはやどう見ても手遅れであった。

パチュリーはまた椅子に座り、ため息を吐いた。

パ「はぁ・・・本当困った奴ね・・・でもうらやましいわね・・・あの元気は・・・」

さっきまで読みかけていた本をまた見始めた。

しかし、今のパチュリーはもうそんな気分ではなかった。

魔理沙のあからさまに元気な様子を見て、パチュリーは正直嫉妬していたのだ。

パ「私も・・・魔理沙ぐらい健康だったらなぁ・・・」

読んでいた本を閉じ、ぼーっと山積みになった本に目をやると、その内の一つに思わず目が止まった。

その本は、明らかに他の本とは違う雰囲気をかもし出していた。

パチュリーは、訳もなくそれに惹かれてしまった。

パ「・・・あ・・・あれは!!」

その本を取り出し、すぐさま読み始めた。
もちろん書いてある事は魔女にしかわからない。事にしてもらいたい。

パ「・・・いける・・・これさえあれば・・・私にも！！」

何かに取り憑かれたように、パチュリーはひたすらにその本を読み続けた。

その頃、紅魔館のバルコニーで、レミリアと咲夜がたわいもない話をしていた。

レ「咲夜、現在の紅魔館の状態は？」

レミリアの問いに、咲夜は、

咲「は、以前妹様の暴れた後等はどうにか修復されました。この分でしたら数日には復旧されるかと思われます。」

それらしい紙を見ながら、レミリアに報告した。

レ「そう。まあ、うまく事が運んだらいいんだけど。」

レミリアの意味深な台詞に、咲夜が思わず尋ねた。

咲「また何かを感じ取ったのですか、おぜう・・・お嬢様。」

いい間違いそうになったが、レミリアはそんな事など構いもせず答えた。

レ「そうね・・・まあ私のこれは、あくまで虫の知らせ程度だから、曖昧なんだけどね。」

咲「また、外から面倒な者が来るかもしれないと？」

レ「いや・・・これは外じゃないわね・・・」

そんな事を言っていると、突如轟音とともに紅魔館のドアが吹き飛び、庭に転がっていった。

咲「は！？まさか、また妹様が！？」

レ「違うわよ咲夜。これは・・・」

しばらくして、吹き飛んだドアから悠然と誰かが出てきた。それはあのパチュリー本人であった。

その様子に、咲夜が思わず驚いた。

咲「パチュリー様！？なぜ図書館からお出でに・・・」

言葉を失った咲夜に、レミリアは、

レ「・・・どうやら、もう引きこもるのはやめたのね。パチュリー。」

全てを覚ったように言った。

パチュリーは庭を歩き、門から堂々と出ようとした。
そこに、珍しく起きていた美鈴が立ちふさがった。

パ「・・・何のつもり？」

明らかに見下した目で美鈴を見た。

美「それはこっちの台詞ですよ。普段図書館から一歩も出ないパチュリー様が、いきなりドアを吹き飛ばして出てきて・・・一体どうしたのですか？パチュリー様はあまり外に出てはよくないはずでは？」

その質問に、パチュリーは高笑いをして返した。

パ「そうね・・・そうよねぇ・・・今までの私ならそんなイメージしかなかった・・・でも今は違うわ！！私は生まれ変わったのよ！！」

その様子に、美鈴は、

美「・・・魔理沙のせいで疲れているとは思ってましたが、ここまでとは・・・」

と呆れた様子を見せた。
その時、さっきドアがっ飛ばされた玄関から、なぜかぼろぼろになった小悪魔がふらふらと出てきた。

子「駄目です・・・美鈴さん・・・パチュリー様に挑んでは・・・今のパチュリー様は・・・」

何かを言いかけたようだが、力尽きたようにばたりと倒れてしまった。
どうやらぼろぼろにしたのは、パチュリー本人のようである。
それを感じ取った美鈴は、

美「・・・えーっと・・・パチュリー様？」

冷や汗がだらだらと出てきていた。
そんな美鈴に対して、パチュリーは両手を広げてどこかで見たことのあるような構えを取り出した。

パ「丁度いいわ。あの子じゃ物足りなかったから、今度はあなたで試してあげるわ！！新しくなった私の力を！！」

パチュリーから、今にも何かが放たれそうだ。
そんなパチュリーに、美鈴は、

美「・・・こうなったら、多勢でかかります！！」

と言ったが早いか、どこからともなく美鈴の部下っぽい者が現れた。
美鈴と共に一斉にパチュリーに飛び掛った瞬間、辺りがパチュリーの体から放たれた光に包まれた。
光が晴れると、そこにはぼろぼろになって倒れた美鈴とその他の部下と、悠然と立ち尽くすパチュリーがいた。

パ「あら・・・貴方達でもこの程度？これじゃウォーミングアップにすらならないわね！！」

更に美鈴を見下した。

美「さ・・・さっきの・・・・まるで・・・・」

美鈴達は、全員倒れたまま気を失った。

パ「いける・・・今の私なら・・・誰にも負けないわ！！はははは！！」

高笑いを上げ、そのまま紅魔館の門を派手に開けて、パチュリーは外へと出て行った。

その様子に咲夜は、

咲「あれは・・・パチュリー様なのですか・・・あれではまるで・・・」

心配そうにレミリアに尋ねた。

レ「そうね。あのままじゃどうなる事やら。」

当のレミリアはのん気な調子である。

咲「レミリア様！？止めなくてよいのですか！？」

多少声を荒げた。

しかし、レミリアはあくまで冷静である。

レ「駄目よ、今、パチュリーは変わろうとしているのだから。」

咲「変わろうとしている？変わったの間違いではないのですか？」

レ「違うわよ。変わろうとしているのよ・・・紛れもなくね。」

そう言いながら、まるで遠くでも見るような目で、パチュリーが向かったと思える方を眺めた。

レ「パチュリー・・・あなたは、自分の運命に抗う事が出来るかしらね・・・・」

見守る母のように、レミリアがぼそりと言った。

その頃、魔理沙は店にてさっきパチュリーからほとんど泥棒まがいに借りていった本を読み漁っていた。

魔「なるほど～、これはこうした方がいいわけか。」

じっくりと読み解いていたその時、店の玄関をノックする音がしてきた。

魔「お、こんな時に一体誰だ？」

玄関を開けると、そこには明らかに普段とは雰囲気の違うパチュリーが立っていた。

魔理沙自身はパチュリーの普段からの違いを感じ取れてはいないようである。

魔「何だ、パチュリーか。わざわざ来るだなんて、一体どうしたん

だ？」

その辺りのおかしさを追求しようとすると、パチュリーは、

パ「用？用ならあるわよ・・・今まで借りた本を、今すぐ全部返しなさい。」

かなり怒った様子で、魔理沙に言った。

魔「ああ、その事か。悪いけど、ちょっと待ってくれないかな？今丁度読んでる所なんだ。」

仮にも事実を言っても、パチュリーは聞く耳を持とうとしない。

パ「そう言って・・・一冊も返した事ないじゃない。」

怒りはさらに強くなる。

魔理沙はそんな怒りをやはり感じ取れない。いや、恐らくはパチュリーがそんな怒るような者だと思っていないからであろう。

とりあえず魔理沙は言い訳を交えた一言を、パチュリーに言った。

魔「読み終えたらちゃんと返すって。」

その一言に、パチュリーの怒りは有頂天に達した。

パ「もういいわ・・・こうなったら実力行使よ！！」

魔「えぇ？それ、マジで言って・・・」

と言いかける前に、魔理沙の店の玄関が派手に爆発した。

魔理沙はとっさに外に飛び出し、パチュリーから距離を取っていた。
魔「・・・どうやらマジみたいか、そんなに大事な本があったのか？」
ばっと戦闘態勢を整えた。
魔理沙もそろそろパチュリーのいつもと違う雰囲気を感じ取ったようである。
パ「そうでもないわよ。私はただ、本を返して欲しいだけよ。さぁ、痛い目をみない内に、おとなしく本を返しなさい！！」
差し出せと言わんばかりに、魔理沙の方に手を出した。
魔「そうか・・・ま、やるって言うならやるだけだ。手加減はなしだぜ、パチュリー！！」
そう言うと空に飛び上がり、いきなり十八番のマスタースパークを構え出した。
魔「いくぜ！！恋符！！マスタァァスパァァァァァク！！！！」
パチュリーに向かって、豪快なマスタースパークが放たれた。
だが、パチュリーは周りに見えない壁でも張っているかのように、魔理沙の放ったマスタースパークを遮った。
その様子に、さすがの魔理沙も戸惑った。
魔「何ぃ？一体どうなってんだ？何か小細工でもしたのか？」
放ち終えた後、パチュリーの方を見たが、これといって何かをした

気配はない。
ただ一つ妙な事があるとするなら、パチュリーが不気味な笑顔を浮かべていた事ぐらいであった。
その様子に魔理沙が臆する事はなかった。

魔「・・・しょうがない、こうなったらパチュリーの苦手な・・・」

自慢の箒にまたがり、パチュリーに向かって全速力で急降下した。

魔「接近戦で叩くのみ！！」

当然パチュリーは弾幕を放って応戦した。
魔理沙はパチュリーの放つ弾幕をかいくぐり、パチュリーに対して、今にも殴りかかれそうな距離まで近づけた。

魔「よし！！もらったぁ！！」

箒をバットのようにして、パチュリーに振りかぶった。
だがその攻撃は、見事に空を切った。

魔「な！？」

振り回した勢いで態勢を大きく崩してしまった。
パチュリーは既に魔理沙の上空にいた。

パ「遅いわね！！」

魔理沙の後頭部に、両手で思いっきりダブルハンマーを放った。

魔「ぐぅ！！」

顔から地面に叩きつけられた。
魔理沙はどうにかして体勢を立て直し、即座にパチュリーから距離を取った。

魔「・・・どういう事だ・・・いくらなんでも道理が通らないぜ・・・病弱のパチュリーに、あんな事が出来る訳ないはず・・・」

だがパチュリーは、その言葉を遮るように答えてきた。

パ「そうね、今までの私ならこんな動き、出来る訳なかったわ。でも・・・ある本が私を変えたのよ!!」

魔「ある本？ある本ってなんだ？」

そう尋ねると、パチュリーは普段から手元に持っている本を魔理沙に見せた。
だが、その本は明らかに普段の本とは違っていた。
魔理沙はその本を見て思わず慄いた。

魔「そ・・・それは・・・」

驚きを隠せない魔理沙。
そんな魔理沙を尻目に、パチュリーが続けた。

パ「ふふ、この本が私を変えたのよ・・・そう、この秘伝の書が!!」

表紙には、子供が書いたような文字で秘伝の書と書かれていた。

魔「まさか・・・パチュリーがそれを・・・」

パ「あら？あなたはこの本を知ってるの？」

魔「ああ・・・知ってるぜ・・・」

パ「そう、知ってるなら話は早いわね。そうよ、これのお陰で、私は今健康体でいられるのよ！！まったく、この本に書いてある物は凄いわね！！喘息が治ってしまえば、私はあなた以上の身体能力を誇れる！！あなた以上の力を見せられるのよ！！」

高らかに話すパチュリーに、魔理沙は、

魔「・・・あのさ・・・パチュリー・・・言いにくいんだけど・・・」

申し訳にくそうな感じで言った。

パチュリーはもちろんお構いなしである。

パ「何よ？降参の一言でも言う気？今更遅いわよ！！今の私は・・・」

魔「そうじゃなくてさ・・・それ・・・私が書いたんだぜ。」

パ「・・・え？」

あまりの衝撃の一言に、さすがのパチュリーも言葉を失った。

魔「いや～、どこにいったのかな～なんて思ってたら、まさかパチュリーの所にあっただなんてな。」

他人事であるかのように話す。

パ「ちょっと！それってどういう事！？」

魔理沙に思わず問いただした。

魔「それにさ、私の今までの魔法薬とかの調合を書いておいたんだぜ。今のパチュリーが使ってるのは、多分スーパース○ーって奴じゃないかな？」

パ「そ、そうよ！！それよ！！紛れもなくそれよ！！」

魔理沙に思わず指差した。

魔「それ、確かに一時的に病気とか忘れちゃって、身体能力とかも滅茶苦茶上がるんだけど・・・とんでもない副作用があるんだぜ・・・」

さっき以上に申し訳なさそうな様子で言ってきた。

パ「ふ、副作用？何よそれ？」

動揺しまくるパチュリー。

魔「えーっと・・・ほら、無茶した分のつけって事で・・・全身が・・・筋肉痛で・・・」

と言ったその瞬間、パチュリーの全身に電撃が走った。筋肉痛の電撃が。

そう、全てはもう手遅れだったのだ。
その日魔法の森に、かつてない悲鳴が響き渡った。

しばらくして、魔理沙の家の布団で寝かされたパチュリーがいた。
そばには魔理沙が椅子に座って看病をしていた。
魔「ははは・・・まさか、パチュリーがあの本に書いてある物を作って、自分で使うなんて・・・思いもしなかったぜ。」
あくまで他人事な調子だ。
パ「う・・・うるさい・・・何もかもあんたのせいよ・・・」
ふてくされるパチュリー。筋肉痛で体はまったく動きそうにない。
魔「でも、やって使ったのは、パチュリー自身だろ？それは私の責任じゃないぜ。」
と正論っぽい感じの一言を言った。
パ「・・・」
さすがに言葉を失った。
そんな様子に、魔理沙が呆れた様子で尋ねた。
魔「にしても、なんでこんな事したんだ？普段のパチュリーからは

考えられないぜ。」

その問いに、パチュリーはか細い声で返した。

パ「・・・たかった・・・」

あまりのもか細い声に、魔理沙が尋ね返した。

魔「は？何て言ったんだ？」

パ「私だって・・・あなたみたいに・・・元気に外で遊んでみたかった・・・でも生まれつきの喘息と・・・この体のせいで・・・そんな事は望めなかった・・・だから・・・一度でいいから・・・元気になりたかった・・・」

パチュリーの目には、自然と涙が溜まってきていた。

そんな様子に、魔理沙は少し冷たい様子で返した。

魔「・・・何だ、そんな事か。」

パ「そうよね・・・貴方にとっては他人事よね・・・」

魔「いや、そうでもないぜ。私だって、昔はパチュリーみたいな引きこもりだった。お前と違って健康なのにな。あの頃は・・・師匠とこーりん以外は、誰も信用できなかったんだ。」

暗い調子で語る。

パ「そんな頃が・・・あなたにあったの？」

信じられない様子で、魔理沙に尋ねた。

魔「ああ、霊夢に会うまでは、私はずーっと一人で閉じこもってたんだ。でも今はそんな事ないぜ。こうしてパチュリーとかアリスとか同じ魔法使いに会えたし、色んな奴に出会えた。だから私は、今こうしていられる事に感謝してる。」

笑顔で語るその顔を見て、パチュリーの心の中で、何ともいえないもどかしさが出来ていた。
そのもどかしさこそ、パチュリーにはなかったものであろう。

パ「（そうね・・・そうよね・・・魔理沙だって恵まれてた訳じゃない・・・だけど魔理沙は私と違って、こんなにも明るく・・・楽しそうにしてる・・・私はただ・・・自分に甘えてただけだった・・・私は、魔理沙の事を何も知らなかった・・・なのに私は、ただ健康な魔理沙に嫉妬して・・・）」

自分の中の情けなさを悔やんでいると、魔理沙がこんな事を言ってきた。

魔「パチュリー、実はな、あの薬にはあの本にも書かれてない欠点があるんだよ。でも、パチュリーはその欠点を見事に超えたんだ。」

パ「何よ・・・それって？」

魔「まあ単純な事だよ。使った本人に強い意志がなかったら・・・あの薬は何の意味もなさないんだよ。だから、パチュリーにはパチュリーなりに強い意志があったんだなって思ったんだ。」

その一言が、パチュリーの中にあったもどかしさを自然と消してい

った。

パ「（そうか・・・私はもう・・・変わってたんだ・・・体とかじゃなくて・・・心が・・・でも私は、それに気づけてなかった・・・本当に大事なのは・・・健康な体でもない・・・凄い力でもない・・・この心なんだ・・・）」

全てを覚ったパチュリーは、さっきまでとは明らかに違う涙を流した。

その様子に魔理沙は、

魔「ちょ、いきなりどうしたんだ!?まだ筋肉痛が残ってたのか!?」

と心配しながらも、見当違いの答えを出した。

そんな魔理沙を、逆に心配するかのように返した。

パ「大丈夫よ・・・もう答えは出たから。」

涙をぬぐい、魔理沙を見据えた。

魔「へ?答え?答えって、何の事だ?」

疑問に満ちた顔で尋ねた。

パ「ふふ・・・なんてこともないわよ・・・」

自然にはぐらかした。

魔「え～?だったら教えてくれてもいいじゃねぇか～・・・」

いじける魔理沙に、パチュリーはあくまでオブラートに隠した。

パ「今は・・・ね。」

そう言って、そっと外の景色を見つめた。

これからもっと輝いて見えてくるであろう景色を、パチュリーはしっかりと見据えた。

数日後、パチュリーは紅魔館の図書館に戻り、いつもと変わらない日々を過ごしていた。

もちろん魔理沙はいつものように来る。だが、今回はいつもと少し変わっていた。

魔「パチュリ〜、悪いけど本借りてくぜ。」

いつもの調子で言ってきたが、やはり何かが違う。

パ「別にいいわよ、でも、わかってるわね？」

承知しているのを前提としたような言い方に、魔理沙は、

魔「ああ、もちろんわかってるぜ。」

阿吽の呼吸で答えた。

二人は合図でもしたかのようにお互いの武器？を構え始めた。

魔・パ「いざ・・・弾幕勝負！！」

そして二人は、図書館の開けた所で、文字通り弾幕戦を始めるのであった。

健康である事はいい事。強い事だって、決して悪い事じゃない。
でも、本当に大事なのは、心の持ちようだと思う。
私はそれを知って変わったのよ。皮肉にもそれを教えてくれたのは、私に迷惑ばっかりかける奴だけどね。

ＢＹ動かない大図書館　パチュリー・ノーレッジ

パチュリー最強伝説　あなたの中で続く

（後書き）

後書き

こんにちわみなさん。とうとう短編にまで手を出した澄田です。ただし幻想入りではありませんけどね。

バクテリアに適当にあげた奴の中で、バクテリアが気に入ったのか知りませんけどやたら言ってきた（それほどでもなかったかな？）ので、とりあえず手直ししてみました。

手直しする前はリアルやりたかっただけでしたので、どうにか投稿するのに相応しい感じにしました。

わしの話は、基本的にキャラに救いを作る的なノリが一番多いんです。これが一番典型的な奴ですね。

まあ個人的には記憶に忘れかけてたぐらいなんですけど、久々に掘ってみたら若かったなぁってしみじみ思いました。

でも話を書いた以上は、これでもしっかりと書き上げたつもりです。

では、この話があなたの心の中にちょっとでも残っていてくれれば、それだけで作者は満足です。

スペシャルサンクス

パチュリー・ノーレッジ　様

霧雨　魔理沙　様

レミリア・スカーレット　様

十六夜　咲夜　様

紅　美鈴　様

小悪魔　様

バクテリア　様

では、このような粗末な物を読んでいただき、真にありがとうございました。

P、S　わしの書いた連載小説、三人一緒に幻想入りや導かれし者が幻想入りもよろしくお願いします（＃＾＿＾＃）

BY澄田　康美

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9773n/

パチュリー最強伝説

2010年10月9日16時13分発行